

## 学 界 報 告

〔学 会 名〕

The American Society of Criminology

(アメリカ犯罪学会)

〔参加セッション名〕

Poster Session

〔発表題目〕

Co-occurrence Network of Hashtags

Incidental to Problem Posting

- Case of Prostitution in Japan-

〔大会期間〕

2019年11月13日(水)~2019年11月16日(土)

〔場 所〕

San Francisco Marriott Marquis

(San Francisco, USA)

〔記 事〕

玉石混交の中から玉を探す

The American Society of Criminology (アメリカ犯罪学会)は参加者4,000人以上、期間中のセッションが1,000以上と北米最大規模の犯罪学に関する国際会議である。午前8時から午後6時20分まで7コマが展開され、1コマあたり50以上のセッションが同時展開されるなど、大規模なものであった。しかしながら、学会運営に関してはスムーズとは言い難い面も目立った。著者はポスター発表であったが、ポスターの掲示時間等が受付時に知らされない、ポスター番号がパンフレットと学会のサイトでずれている、二部制のポスター発表の切り替え時に前の発表者がそのまま残っているといった事態に遭遇した。一つ一つは大したことではないものの、著者と同じく困惑している発表者も多かった。さらに、同時開講のセッションが多いこともあり、一つ一つのセッションの参加者数は10名前後と想像したよりも大幅に少なかった。何よりも驚いたのは、**Presidential Panel**という学会長主催のパネルセッションでさえ参加者が30名程度であったことである(ただし、**Presidential Panel**は複数回開催されているため、著者が参加した回がたまたま少なかった可能性はある)。上記のように、参加者数

やセッション数は多いものの、あまりまとまっているという印象は受けなかった。これは犯罪学という学問分野が極めて細分化されていることに起因しているのかもしれない。

今回、こちらの学会に参加した理由としては、ソーシャルメディアを通じた犯罪やサイバー犯罪に関する研究動向を犯罪学の側から把握しようとしたことが挙げられる。そのため、“Using Social Media to Promote Research Workshop,” “Using Big Data for Criminal Justice Research,” “Mining Big Data from Administrative Records: Life Course Research from Finland, Norway, and Sweden,” “Media Constructions of Race and Criminality,” “Data Science Solutions to Combatting Opioid and Crime Problems”といったソーシャルメディアやビッグデータに関連したセッションを中心に参加した。しかしながら、期待していた最先端の分析手法を用いた発表というのはほとんどなく、むしろ国際比較等の分析対象における差別化の方が目立っていた。セッション名に“Big Data”とあっても大規模データを利用していない発表もあり、犯罪学分野におけるデータ分析等の情報学分野との融合は北米最大規模の国際学会であっても顕著に進んでいるわけではないことを実感した。ただし、博士課程の学生など比較的若い研究者の発表では工夫したデータ分析手法を用いたものもいくつか見られたため、今後こうした発表が増えていくかもしれない。

著者の発表は**Twitter**のハッシュタグの共起関係から援助交際用に用いられる頻度の高いハッシュタグを特定し、ハッシュタグの組み合わせから援助交際の蓋然性が高い投稿を推定するという内容のものであった。著者自身は犯罪学を専門としているわけではないが、ソーシャルメディア分析の手法が犯罪学においても応用できるところに可能性を感じ、その点を発表では強調した。しかしながら、著者の発表を含めて、日本を題材とした研究はポスターセッションではあまり注目を得られていなかった。これは参加者の興味が「北米の」事例に集中していたことがあり、分析手法を差別化要因として選択したことの戦略ミ

スがあったかもしれない。そうした意味では、アジア犯罪学会の方が研究テーマからは適切だったようにも思われる（余談だが、2020年のアジア犯罪学会は龍谷大学で開催される予定であり、本学会でも告知のブースが出されていた）。こうしたミスマッチに気づけたことも国際学会に参加した成果であった。

最後に、滞在した **San Francisco** の治安について述べたい。渡航前から治安の悪さについては聞いていたが、現地の様子は想像以上であった。ホームレスや薬物中毒者らしき人物が街中のいたるところに存在しており、日中であっても人通りの少ないエリアでは恐怖を感じるなど、犯罪学という学問分野が北米で発展している背景要因を体感できたように思う。加えて、**Twitter** や **Uber** といった IT の世界的大企業が **San Francisco** の治安の悪いエリアに本社を移転しており、「コード・テンダーロイン」という貧困者支援・社会更生支援のプロジェクトに携わっていることを今回の渡航をきっかけに知ることができた。そうした面でも、最先端の情報技術と犯罪学という組み合わせは今後重要になってくることが予想される。

（吉見 憲二）